アフリカの果物のお話
～マラウイ編～

果物の樹は自分たちの手で植えて、育てて、収穫した果実を食べるもの。私たち日本人はそう思いがちです。アフリカでは、果物は実のなる樹に登れば、いつでも自由に食べられる甘い「おやつ」。そして、伝統的に利用されてきたフリカ在来の果樹は、森の中に隠れています。アフリカの大地で大きく育った果樹の枝と葉は、乾燥した「風」から家を守り、地中深く伸びた樹の根は、畑の「土」を守ってくれる大事な存在です。さらに、アフリカの果物は、お金のなる樹で大事な換金作物であるのと同時に、アフリカの子どもたちの貴重な「おやつ」であり、不足しがちなビタミン類の欠乏を補っています。

アフリカ大陸に渡ってきた外国育ちの果物のタネは、生まれ育った土地から「人」の移動によって運ばれてきました。そして、アフリカの気候と風土に合ったものだけが生き残ることが出来たようです。

今回はその中から、私が国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊でボランティアとして 2 年間（2006 年～2008 年）過ごし、その後、博士論文の調査（2010 年～2013 年）を行ったアフリカ東南部に位置するマラウイのミカンとモモの２つの事例をご紹介しましょう。

事例１　ムワンザ県のミカン栽培

マラウイの南部州のムワンザ（Mwanza）県はミカンの産地として有名です。博士論文の調査地としてムワンザ県を選んだ理由は、2008 年 6 月に初めて訪問した際に、庭先に植えられたミカンの本数の多さに驚いたからです。

写真①ムワンザ県の青空ミカン市場で価格交渉する仲買人たち

「どうしてムワンザ県だけで、こんなにミカン栽培が普及したのだろう？」その謎を解きたくて、ミカン農家を対象に聞き取り調査を行いました。

庭先に植えられたミカンの樹にはぞれぞれの持ち主と歴史があって面白いので、少し紹介します。

写真②ミカンを食べようとする子ども

写真③ムワンザ県の青空市場に集まる輸出仲買人とミカン農家

教会の果樹園からもらってきたお気に入りのミカンの樹からタネを植えた人。タバコ農園の跡地にこっそり植えたミカンを「神様の樹」として大切に育ててきた人。おばあちゃんの土地に植えられたミカンを果樹ごと相続したラッキーな人。奥さんのために南アフリカからの出稼ぎから戻ってきて、引っ越した新しい土地に一本ずつミカンを植え続けた優しい旦那さん。

ムワンザ県のミカンの樹には１本ずつにそれぞれのストーリーがあって、聞くたびに驚かされます。そんな歴史のあるミカンの樹に子どもたちは無邪気に登って、今日も美味しい「おやつ」を狙っているのです。

写真④（左）1970 年代初頭に植えられた樹齢約 50 年のミカンの樹の前で家族写真

写真⑤（右）井戸の近くにある樹の前に集まるムワンザ県の子どもたち

事例２　デッザ県のモモ栽培

マラウイ中部州のデッザ（Dedza）県を中心とした山間部には、温帯果樹のモモが育つ冷涼な地域があります。私はJICAの青年海外協力隊として、マラウイ食糧安全保障省のデッザ県農業開発事務所の作物部門に2年間(2006年～2008年)赴任し、果樹担当として農業普及員と一緒に果樹栽培の普及活動に携わりました。果樹農家やデッザ県でも深刻だったエイズで両親を亡くした孤児たちの支援グループなどを対象に活動したので、その一部をご紹介します。

マラウイで栽培されているモモは濃いピンク色の花が咲き、梅のような小さな果実が収穫できます。そして、マラウイに外国生まれのモモを持ち込んだのは、キリスト教の宣教師であるヨーロッパ人と言われています。つまり、一世紀近く前に持ち込まれたことになります。

そのため、村の中には古いモモの樹が村の広場を陣取っていることもあるくらいです。いつ誰が植えたのか、村人にも分からないくらい古いモモの樹もあって「きっとこのモモの樹は、村の歴史を全部知っているのだろうな。」と古いモモの樹に出会う度に思っていました。

そして、デッザ県の子どもたちは、モモの果実が熟すのを「今か今か」と待っています。学校からの帰り道、甘くなるのを待ちきれなくて、カリカリと小梅のようにモモの実をかじりながら、歩く子たちを見かけたりして。

写真⑥大好きなモモに樹を植える前に、頑張って堀った穴に入って喜ぶ様子

写真⑦「モモのためなら水やりだって頑張っちゃうよ」と張り切る子どもたち

写真⑨１人２本ずつ準備が出来きて、嬉しそうにモモの苗を持ち帰る子どもたち

写真⑧植え付け準備万端にして、モモの接ぎ木苗を受け取りに来た村人と子どもたち

デッザ県の子どもたちは、モモの果実が大好きなので、私は同僚の農業普及員とエイズ孤児支援グループのメンバーと一緒に大切に育てた改良品種のモモの苗木をエイズ孤児につき、2 本ずつ配布することにしました。

2007 年にはまだ少女だった子が母親になって、「うちの子、モモが大好きなのよ。実がなる季節になると毎年あなたのことを思い出すわ。」こんな嬉しい言葉をもらえるのも、今まで苦労して、アフリカの大地で果樹を植え続けてきたから。

これからも私が植えた果樹に毎年たくさんの果実が実って、アフリカの子どもたちを笑顔に出来ますように。

福田聖子（ふくだせいこ）

写真⑩雨期後には予想以上に大きく成長していた

モモの樹

写真⑪さらに３年後、大人の背丈よりも成長し

たモモの樹

写真⑫若い母親にモモの果実をもらって泣き止ん

だ子ども